

日本語教育副専攻科目における言語ポートレートの導入と実践から 見えてきたこと

三輪 聖 (テュービンゲン大学)

毛利 貴美 (岡山大学)

要旨

現代日本では文化的・言語的に多様な人が増えており、どうすれば共に生きることができるのか、今まさに一人ひとりが考えていくべき課題である。筆者らは、欧州の複言語・複文化主義の理念や価値観を日本の大学における教育現場に導入し、受講生が共感や理解を得、自らの意識や価値観を揺さぶられるような学びの機会を作り出すことはできないかと考えた。そこで、岡山大学の専攻日本語教育コースにおいて複言語・複文化主義をテーマとする授業を2021年と2022年に実施した。言語ポートレート活動を取り入れた実践を行い、分析した結果、言語ポートレートは自らの「わたし」という一個人を形作る多様なことばとそれを支える体験に気づき、言語的多様性への感受性を豊かにし、言語・文化的に多様な人と共に生きるために必要な開かれた寛容な姿勢、態度、価値観を形成するための有効なツールとなりえると考えられた。

【キーワード】 複言語・複文化主義、言語ポートレート、日本語教育副専攻科目

Keywords: plurilingualism/pluriculturalism, language portrait, Japanese language education minor course

1 研究の背景

日本における在留外国人の数は2022年末には300万人を超え、在留外国人の出身国籍や地域も多様化している(出入国在留管理庁2023)。そのような状況に伴い、言語的・文化的に多様な背景を持つ人々が増えてきており、どうすれば多様な文化や価値観を持った人々が共に生きることができるのか、共にどんな社会を目指すのか、一人ひとりが考えていく必要性が増している。その共生社会を構成する一員である市民に求められる力として特に言語能力が注目されがちであるが、たとえ自由に言語を操る高度な言語能力を有していても、文化や価値観が異なる人とうまく共生ができないというケースも多々ある。言語能力と同時あるいはそれ以前に共生の

理念を知り、育んでいく必要がある。そして、その理念はマジョリティであるホスト国のメンバーにも必要であることは間違いない。では、どうすれば個々人の中にそのような理念を形作っていくことができるのか。欧州では、複言語・複文化主義の理念のもと、多様な言語や価値観を持つ人々と共に生きることができる能力や姿勢を育み、個々人が尊重される平和な共生社会を形成することが目指されている。その理念を具現化するにあたって教育が果たす役割は非常に大きく、複言語・複文化主義の理念に基づいた教育実践の視座から得られることは大いにあると言えよう。

そこで筆者らは、将来的に日本語教育に教師として関わっていく人材の養成に携わる教員として、日本語教育を副専攻科目として履修している学生たちに対して欧州の複言語・複文化主義の理念や価値観を学ぶ場をつくりたいと考えた。ただ、複言語・複文化主義の考え方を「ヨーロッパにおける言語教育政策の理念」というように知識としてだけ学ぶと、日本で生まれ育っている人には抽象的な概念に写り、「自分とは異なる遠い世界の話」で終わってしまう可能性がある。しかし、実際はそうではない。どうすれば学生たちが複言語・複文化主義の理念を自分の中に落とし込み、身近なこととして捉えることができるようになるのだろうか。

筆者らは、複言語キッズ¹が親子で対話をしながら「ことばの育ち」を記録する『わたし語ポートフォリオ』²に収録されている「言語ポートレート」を使用した活動を日本語教育副専攻科目の授業に取り入れることにした。

2 言語ポートレートに関する先行研究

言語ポートレートは、人の身体を形どった線画の上に自分の言語を位置づけていくものである（図 1 参照）。1981 年に、移民のマルチリンガルの子どもたちが自分の中にあるそれぞれの言語にどのような価値を見出しているか、どのような感情や気持ちを抱いているのかを明らかにし、それを支えていくことを目的として開発されて以来、現在も様々な教育現場で使用されている。子どもだけでなく、大学生や教師なども自らの言語資源や言語使用に関する意識や情意を視覚的に表現することにより、新しい気付きや見方が得られることが期待できる。言語ポートレートを使った活動の手順は次の通りである（Bellet 2016, Busch 2012）。①自分の中にある言葉を

身体のどこかに配置し、色をつけて描き出す。その人の身体部位と色の選択は、言葉と結びついた情意や気持ちを表すとされている。②言語ポートレートに描き出したことを他者に語る。語ることで自分の言語経験とじっくりと向き合うことができ、自身の言語イデオロギーに気付かされることもある。言語ポートレートに語りが重なることによって、その人の言語的なバイオグラフィーがより鮮明に可視化されるのである。

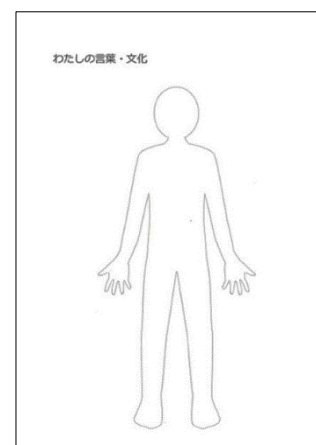


図1：言語ポートレート
(『わたし語ポートフォリオ』より)

3 言語ポートレートを使った教育実践の試み

岡山大学の日本語教育副専攻コースで毛利が担当している科目「グローバル社会における日本語教育」において、複言語・複文化主義をテーマとする授業を2021年と2022年に実施した。授業担当者の毛利が1日目に複言語・複文化主義、継承語教育、CEFRについての基礎的知識の導入後、2日目にオンラインにてドイツ・テュービンゲン大学講師の三輪を招聘した。三輪が複言語・複文化主義の理念が教育の現場でどのように具現化されているかという話をしたあと、より深い理解を促すことを目的とした活動として「言語ポートレート」の実践を行った。

4 研究方法

本研究では「言語ポートレート」の活動後に以下の調査を行った。

<調査1>LMS上のコメントの収集と分析

- ・調査協力者：履修者40名（2021年22名，2022年18名）
- ・調査方法：言語ポートレートの共有と書き手自身からのコメント、他の履修者らのコメントを収集し、分析を行った。

<調査2>調査1で多くの気づきに言及した履修者へのインタビュー

- ・調査協力者：履修者4名（表1参照）
- ・調査方法：調査協力者が自分自身で描いた言語ポートレートとLMSへの書き込みを見せながらフォローアップ・インタビューを行った。

本発表では調査2を中心に結果の報告を行う。

表 1：調査協力者の詳細

協力者	国籍	所属	年齢	来日歴
H	日本	日本語教育副専攻生	40代	
R	台湾	日本語教育副専攻生	30代	来日 20年
N	タイ	交換留学生	20代	来日 3か月
O	日本	工学部 2年生	20代	

5 分析の結果

本研究で言語ポートレートの実践についてのインタビューを行った結果、「自分の中身が可視化され、もう一回考え直す機会、自分を再認識する機会があった」等の回答があり、受講者全員が活動を肯定的に捉えていたことがわかった。

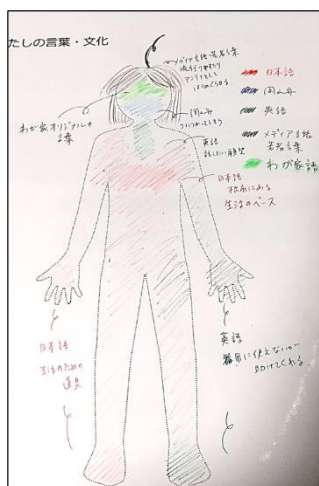


図 2：Hの言語ポートレート

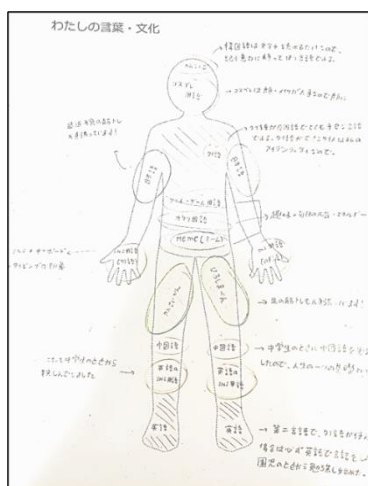


図 3：Nの言語ポートレート

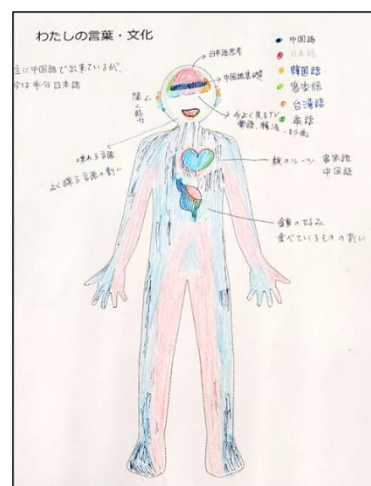


図 4：Rの言語ポートレート

5.1 自分の複言語性への気づき

社会人であるHは、日本語や英語に加え、家族だけが話す言葉「わが家語」（図2の緑の部分）について説明し、「（言語ポートレートを描く）機会がないと、我が家のオリジナル言語も考えた事なかったことなので、それは面白い発見だなと思いました。」と、自分が属するコミュニティのみが持つ言語への気づきがあったことを述べた。さらに、Hは「私（の使える言語）ってこんなにあったのね、みたいな自己肯定感につながる感じ。」と述べ、自身の複言語性への気づきと複言語主義の理念にも繋がる「自己肯定感」について言及した。この「自己肯定感」については、同様に、タイ人の交換留学生Nが「（言語ポートレートは）言語レベルが制限され

てないから、本当に少しでもできたら描けるから、すごい自己肯定感がありますよね。」と、母語レベルを目標としない複言語主義の理念が自己肯定感につながったことに言及している。加えてNは、「自分にとってタイ語、英語、日本語が重要なんだなと気づきました。これからも頑張りたいです。」と、自分にとっての言葉の重要性をそれぞれ可視化できたことで、学習目標が明確になったことに言及していた。

5.2 アイデンティティへの気づき

Nは、言語ポートレートで人の形の心臓部に母語のタイ語をハートで囲って描いた。Nは「日本に来てから、差別などを心配してタイ人であることを隠していましたが、タイ語という言葉にハートを付けて、心臓のところに描くことができ、改めて自分の居場所に気づきました。」と述べ、タイ人としてのアイデンティティを認識したことを語った。

台湾から来日して20年になるRは、言語ポートレートに「主に中国語でできてるが、半分日本語」と書き、心臓部分にはハートを描いた。その横に「ルーツ」「客家語」「中国語」と記し、胃の部分の7割程度に青色（中国語）と緑色（客家語）を塗った。Rはインタビューで「長く日本に住んで“日本人みたい”と言われても“自分は台湾人で、親が客家の民族”っていうのは残っていて、それが影響して食べ物（胃）になる。子供の頃おばあちゃんが作っていた客家の料理を今でも自分が再現できないかなって考えたりしてるから自分の中には残ってるんだなって。」と継承するものとしての客家語に言及した。また、LMSでRの説明を読んだ他の履修者の「異文化適応の葛藤の様子が映し出されて興味深いと思った。」というコメントに、Rは「（葛藤は）だいぶ終わってた気がするんですけど…日本は長いからずっと葛藤してて。年齢と共に適応していかないといけないけど。」と述べ、アイデンティティのゆらぎや葛藤が継続していることに触れた。

5.3 過去のエピソードの想起

工学部2年生のOは、言語ポートレートの人型の中心（丹田）に、関西弁を器の底にある黒い液体のような存在として描いた。インタビューでは「父親が関西の出身でかなり気が強いタイプで、ビクビクしながら幼少期を過ごしたんで

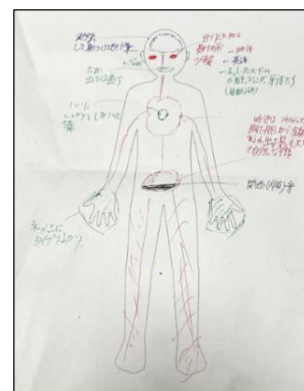


図5：Oの言語ポートレート

す。ですから、強い言葉を使いたくないんですけど、激しい論争になったりすると関西弁が強く出てしまったり。（関西弁に纏わる思い出は）自分の中では嫌な部分でもあるし、捨てきれない部分でもあるので。煮詰まっているんです。鍋の底に取れない汚れみたいに感じるんです。」と、過去の記憶からその理由を語っていた。

以上のように、言語ポートレート活動を体験した履修者に様々な気づきがあった。

6 まとめ

本研究の結果から、言語ポートレート活動は学生たちの言語・文化的多様性に対する感性を豊かにし、多様な人と共に生きるために必要な開かれた寛容な姿勢、態度、価値観を形成するきっかけを作ってくれることが明らかになった。日本語教師を目指している学生たちは、言語ポートレート活動に取り組んだことによって、自身の中で複言語主義の発想を「遠いヨーロッパにあるもの」から「自分ごと」として捉え直していった。言語ポートレート活動は、複言語主義の理念を「自分のもの」にし、言語・文化的に多様な人と共生するために必要な意識を目覚めさせる可能性があるツールであると言えよう。

<注>

1. 複言語キッズとは、毎日の生活の中で二つ以上のことばと文化につながりを持っている子どもたちを指す（チーム・もっとつなぐ）
2. 複言語ファミリーをつなぐポータルサイト「つなぐ」を参照（国際交流基金ケルン日本文化会館とチーム・もっとつなぐが共催運営）, <https://tsunagu.jp/>（2023年9月19日）

<引用文献>

- Bellet, Sandra (2016) *Sprachenportraits – ein introspektives Instrument für das eigene Spracherleben*, F&E Edition - Die Zeitschrift des Zentrums für Forschung, Entwicklung und Wissenstransfer, Feldkirch: Pädagogische Hochschule Vorarlberg.
- Busch, Brigitta (2012) *The Linguistic Repertoire Revisited*, Applied Linguistics 33 (5): 503-523, Oxford University Press.
- 出入国在留管理庁（2023）報道発表資料,
https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00033.html（2023年9月19日）